

泰ちゃんと薪木切り

大雪が降っているとき、思い出すエピソードがある。

田舎では近年まで、家庭の燃料は総て自家の持ち山から切り出した雑木であった。私の生家からは遠く、近い所で徒歩三十分、遠い所になると一時間以上の山奥だ。そこは、ナラ、クヌギ、ケヤキ、クリ何でも生えてるいた。

旧正月近くになると農作業が終わる。春の農作業が始まるまでの二〜三ヶ月の間に、一年分の焚き木を切りに山に入る。雪の季節だから、山には雪が多い。雪をかき分けかき分け、太い木も、細い木も、片っ端から切り倒す。切り倒した木は、五十センチ位に揃えて、切っていく。

切った木は、木と木の間には揃えて積み重ねる。細い部分と小枝は、「芝まるき」と言っつて、長さ一米・太さ四十センチ位に束ねる。

泰ちゃんと古林という山奥に、焚き木切りに行つた時の思い出だ。どんより曇っているが雪は降っていない。二人して競争のように、鋸で切り倒していたら、雪が降ってきた。初めは大した事が無かったが、一時間位過ぎたら大降りになり、大雪になってきた。

私は、どちらが先に根を上げるかと考え、黙々と頑張つた。まずまず大雪になってきて、近くに居る泰ちゃんの姿が見えない位だ。もう限界と思つて、泰ちゃんに、もう止めようと言おうとした。

そして「やあー」と私が声を出したら、同時に泰ちゃんも「やあー」との声が一つになり、大笑いになった。

泰ちゃんも「すんちゃん根を上げるまで、仕事を止めないと思つたが、もう駄目だと思ひ、声を出したのが同時だった」と言つた。働いて居れば寒くないが、作業を休止すると寒さが身に凍みる。

大雪の中を駆け足で山を下つた。

切つた焚き木は四、五月頃になると、乾燥して軽くなる。毎朝早く起き、母を除き、全員して馬に背負わせたり、自分達が背負つたりして運ぶ。一年分の燃料である、煮炊き、風呂焚き、暖房用、相当な量だった。

十二、三才の頃より朝背負い（あさじよい、と言つた）に連れて行かれ、帰つてから朝食、受け持ち場所の掃除をしてから学校に行く。

泰ちゃんと、「やあー」と同時に言つて仕事を止めた大雪の山奥での情景を思い出し。今は亡き弟、泰ちゃんを偲び、涙にむせぶ。

平成十四年十月十五日